

すみればの未来にむけて

はじめに

2018年度、世田谷区立桜丘すみれば自然庭園（以下、すみれば）は開園15周年を迎える。2000年に始まった世田谷区桜丘4丁目緑地計画から3年の準備期間を経て、2003年に開園。5年ごとを節目として、記念行事の開催や生物調査記録誌作成を行ってきた。この15周年は一つの節目として、新たな動きが始まろうとしている。

すみればの在り方

そもそも、すみればは実業家であった故植村傳助氏の庭園であった。氏の意向によりこの地に武蔵野の自然を再現すべく、およそ6000坪の敷地にヤマザクラやコナラ、イロハモミジ等の樹木を配し、また、ウメやユズといった果実木も植えられ、のちに「木々の織りなす四季おりおりの自然の美しさは心にこよなき安らぎを与えてくれた」とご子息が回顧されている。



庭園当時の写真

そんな私邸の庭が世田谷区に供出されることとなったのは2000年のころである。

まちづくりセンター（現：（一財）世田谷トラストまちづくり）による呼びかけで緑地づくりのワークショップが開かれ、庭園の近隣に住む住民が参加し、自らの街の緑地がどうあるべきかが話し合われた。その時の参加者が中心となって、市民団体・世田谷すみればネットが組織され、公的な世田谷区、主幹団体となる（一財）世田谷トラストまちづくりとによる一体の運営が現在行われている。

生態教育センターは2000年の緑地づくりワークショップから参加し、以降、インタープリターを派遣しすみればの管理運営に参画している。

変化するすみれば

2003年、「都市の中の自然庭園＝ナチュラルガーデン」を緑地の基本方針として掲げ、生物多様性保全管理がスタート。従来の公園とは違い、花壇などがない緑地は理解を得るには時間を要したが、現在では多様な生きものたちを見て、ふれて、楽しめる緑地は、近隣小学校の学習の場や子どもたちの遊びの場として活用されている。



枯れ枝を積んで生きものすみかにしている



子どもたちが生きものにふれあう

こうした取り組みは近年策定された「世田谷区生物多様性地域戦略」において区内の実施先進地として取り上げられ、注目を集めている。

一方ですみればを取り巻く環境が変化しつつある。公園の利用者層が小中学生の子どもたちよりも未就学児童が目立ってきた。15年という時間を経て、変化するニーズやターゲットに答えつつ、どうすれば持続可能なすみればの緑地を守れるかを見つめ直す時が来たのかもしれない。

今までのすみれば、これからのすみれば

これからのすみればについて、2つの動きが始まった。

一つは過去の記録を残すこと。

次世代に引き継ぐためにも植村氏が残してくれたような記録が必要なのではないかと。幸いなことに緑地づくりにかかわった当時の担当者の方々が健在であり、すみればが「すみれば」に至る経緯を記憶されている。これらを聞き取りし、経緯をまとめることで将来に向けて「すみればらしさ」を確固たるものとしようとしている。また、生物の記録も大切である。これまでに蓄積されてきた日々の生きものの記録はすみれば自然庭園のある桜丘だけでなく、世田谷区の記録としても貴重な資料であることは間違いない。

もう一つは自然環境の在り方、計画の見直しである。

生物多様性をもっと豊かにするためにはどうしたらよいか。開園当初に策定された管理方針を変えず、ゾーニングを再検討することで、管理の簡素化や持続可能な緑地づくりを目指そうとしている。検討会を開いて、イギリスのワイルドライフガーデンを参考にレイズベッド（車椅子でも生きもの観察ができる花壇）や湿地づくりなど、植村氏の想い＝武蔵野の自然の復元はそのまま次世代につながるすみればを検討している。



検討会の様子

さいごに

すみればを立ち上げたすみればネットでは、地域の宝であるすみればを継続するためにはどうしたらよいか、参加しているメンバーそれぞれが危機意識をもって取り組んでいる。私たちはこうした想いに寄り添い、今後もサポートしていきたいと考えている。

世田谷区立 桜丘すみれば自然庭園
インタープリター 菊池早苗

<参考図書>

「植村家の庭園」 植村家著 1998年発行

「都市における生物多様性」

世田谷区立桜丘すみれば自然庭園自然記録誌

桜丘すみれば自然庭園10周年記念事業実行委員会 2013年6月発行



すみればにスミレがこれからも咲くように